南蛮の風紀行　25. 地中海の風に吹かれて

午後 3 時 40 分にバルセロナ・サンツ駅に到着しました。ホテルに向かう前にまずセビリア行きの新幹線（AVE）の時刻を確認しました。タクシーでホテルまで行き、チェックインして迷路のような廊下や階段を辿ってやっと思いで宿に荷物を放り込み、もう一度、今度は地下鉄でサンツ駅に戻り、バス会社(ユーロライン)に行ってセビリアからリスボンへのバスの便を探しました。別の旅行エージェントのカウンターで、飛行機の便も調べましたが良いのがなく結局バスにすることにしました。駅で AVE のセビリア行きの切符を買う行列の整理券を確保してから、バス会社に戻りました。残念ながら発券にはパスポートがいるとのことで、また駅の行列に戻りセビリア行の AVE の切符を買い、サンツ駅を出たのは 5 時 30 分頃でした。

モンジェイック城の大砲が豪華なクルーズ船を狙っています。決して寓話や皮肉の世界ではなく、21 世紀の今日でもこの海はそんな怖さを秘めています。

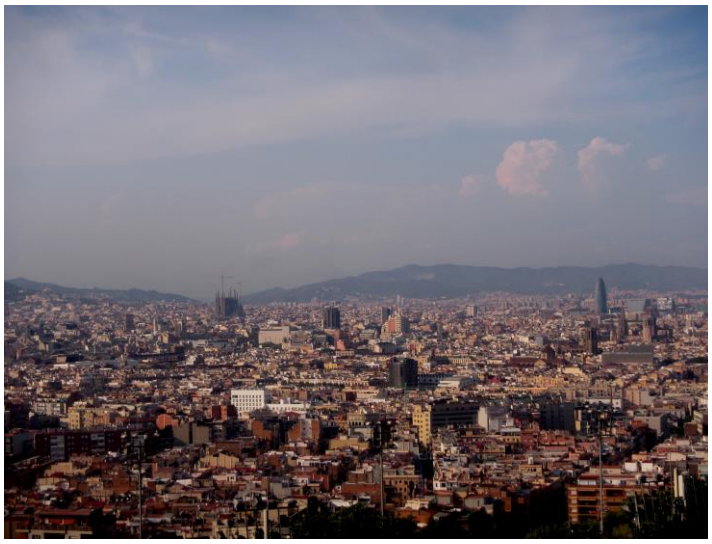
休む間もなくモンジェイックの丘に聳える同名の城を目指すことにしました。バルセロナは人口約１６０万人だそうです。日本なら人口１５０万人の福岡市と同じくらいの港町ですが、ほんの少し歩いただけで街並みの洗練された雰囲気を感じさせてくれます。このまちに比べたらマドリッドでさえ鄙びていると感じますし、リスボンやポルトの街並みがセピア色に霞んでしまうほどです。このまちの歴史を思えばスペインというより、フランスに近い文化が根付いているとしても不思議はありません。スペインから独立したいという機運が生まれることさえ分る気がします。

モンジェイックの丘に登りたかったのは海の色を見たかったからです。実はわたしにとって地中海は初めてではありません。１９９５年に半年ほどエジプトのアレキサンドリアに住んだことがあります。ただ、何せアレキサンドリアは地中海のほとんど東のはずれです。同じ海でもその色は違うかもしれないと思い、それを確認したかったの

モンジェイック城は近世の城ではあるのですが、ここバルセロナという地の歴史を考えると、この地で流されたであろう血の量の事を考えてしまいます。

です。地中海の海の色は東西で同じでした。群青色、群青とはラピスラズリという鉱物を砕いて作る絵の具の色であり、ツタンカーメンの黄金の仮面の青ですが、まさしくその群青色というのが相応しい色なのです。

それにしても、わたしが今見ているこの海は、長い歴史の中で沿岸の人々を翻弄し続けてきました。古くはホメロスの時代、地中海は外洋そのものでした。それからフェニキア人、ギリシャ人の時代を経るにつれ次第に小さくなり、ついに古代ローマの時代に内海化しました。ところがローマ帝国が東西に分裂したあと西ローマ帝国が滅び、東ローマ帝国がビザンチン帝国となってからは、イスラムの台頭によって、地中海は内海から再び国を分ける海となりました。いったんはイスラム化したイベリア半島は、フランク王国の台頭から神聖ローマ帝国の成立とそれに続くレコンキスタによって再びキリスト者が奪還しました。その過程でも眼前のこの海の制海権に握って歴史の舞台に登場した人々は数知れません。さらに、今この時間も混乱を極めている地中海南岸の諸国から、命からがら海を渡ってくる人々がいるのです。しかも、その人々は殆どがムスリムなのです。千年以上も前から数百年間もの間繰り広げられた、地中海の南から北へのアラブ人やムーア人の侵攻とイスラム化、それを押し返して再び取り戻すための戦い（レコンキスタ）という、イベリア半島を含めた地中海北岸の広い地域に起こった凄絶な戦いの歴史を、目の前で起こっている大量の難民流入に重ねて見る人も多いのではないでしょうか。



モンジェイックの丘から北側に広がるバルセロナの中心市街地は、大都市ならどこでも同じスモッグに霞んでいます。張るかキロほど離れたところに、ガウディ設計の聖家族教会が見えています。

スペイン広場からモンジェイックの丘に向って広がる、万博記念公園にも北アフリカからの観光客らしい人々が大勢来ていました。

沈まんとする夕日にも負けないラピスラズリ色の海ですが、わたしには人間の業（ごう）とか性（さが）とかを溶かし込んで、真っ赤な血の色さえも懐深く隠しているのではないかと錯覚さえ感じさせます。実はアレキサンドリアやリビア国境に近いマルサマトルーフの海を見た時もそうでしたが、地中海の海の青い色にはどこか人の血の赤い色が含まれているという思いから、わたしは逃れることがで

きませんでした。
　ところで、わたしは天正遣欧少年使節がスペインからイタリアに向かって船出をしたのはバルセロナではないかと勝手に思っていました。しかし、自分の浅学を恥じるしかありません。遣欧使節の出港地は遥か南のバレンシアのアリカンテという港町でした。バルセロナとその周りの辺境伯領の歴史を知ってさえいれば、スペイン王がバルセロナを使節のための出港地に選ぶことなどありえないことも自明だったのですから。
　港には停泊中の豪華なクルーズ船が何隻も見えています。さすがに地中海に咲く花の一つと謳われているだけの華やかさを感じます。目を陸地側に移すと市街が一望でき、北側約５ｋｍほどのところには聖家族教会の尖塔群が霞んでいます。わたしはパリをはじめフランスの都市に行ったことはありませんが、イベリア半島の中にポツンとここだけがフランスの町ではないかと錯覚しそうでした。